

## 連休に読んだ本

### 図書館係 阿部健治

「伊坂幸太郎は好きじゃないんですね。」と隣席の星野先生に突然言われて、ギョッとなった。伊坂は本屋大賞の最多ノミネート作家だが、筆者は一冊も読んでいない（星野先生、忙しそうなのに、4月号の本屋大賞ノミネート作品の表で、太字になってなかったの、ちゃんとチェックしてくれてたんですね。）。

本屋大賞のノミネート作は皆オススメだと言った（もちろんこれを下ろす気はないですよ）けど、やはり少々苦手な作家というのはあって、有名どころでは伊坂と森見登美彦がそれなのだ。伊坂は『アヒルと鴨のコインロッカー』（濱田岳が初々しい。それに瑛太がすごくカッコイイ。男から見てもほれほれするよね。）、『重力ピエロ』、『ゴールデンランバー』等は映画で見て、すごさは十分わかっているつもりなのだが、暴力的なものがいやなのか、ちょっと自分でもはっきりとはわからないのだが食指が動かない。森見も相性が悪いらしく代表作の『夜は短し歩けよ乙女』が最初から楽しめなかった。筆者は酒が飲めないので、酔っ払って夜の町を闊歩する主人公には、どうにも感情移入できないのだ。

ただ、伊坂や森見に熱烈なファンが数多くいることは肌で感じており（昨年まで勤めていた学校で森見ファンの女子生徒に猛烈な抗議を受けたし、この学校でも伊坂ファンと言う人に既に三人も接しているの…）、彼らの価値を認めることには全く異論はない。

冒頭でこんなことを書いたのは、**多くの人に評価された書物というのは必ずそれなりの良さがあるはずなので、読書への門戸は広く開けておくべきだ**という思いがあるからだ。私に国語を教えてくれたのは、後に本校の校長も務めた先生だったが、常々森鷗外の『渋江抽斎』が最高の名文だということを言っていたので、**根は素直な筆者**（一部では「頑固だ」という人もあるようだが）は、国語教師としてこれは解決せねばならないと決意して、20代、30代、40代とだいたい10年ごとに挑戦して、3回目によく少しはその意味がわかった気がした。この書には「ドラマ」が全くなく、幕末の医師の生活をたんたんと綴るだけだから少なくとも胸は躍らない。しかし、鷗外は「そこにこそ人生の本質がある」と言っているのだろう。これを理解するには読み手にも歳月が必要なのだと思った。

そんなわけで、多くの人が評価する作品にはとりあえず首を突っ込んでみるのが大切だと思って、バラエティに富んだ本屋大賞ノミネート作品（群）をオススメしたわけである。最初は自分が面白いと思う作家や分野をどんどん読んでみるのがよい。そして読書の習慣や地力（変な言い方だが）がついたら、やや異質と思えるものに挑んでいくとよい。そういう過程を経て、「これは」と思える書物に出会えた喜びは人生における最高の経験の一つとさえ言えると思う。

さて、では本題に入ろう。

本屋大賞ノミネート作品一覧をもう一度見渡してみたら、自分が読んだのは33作。全162作のわずか20%に過ぎないことがわかった。そこで猛省(?)した筆者は5月の十連休などを利用してこの比率をもう少し高めようと考え、近藤史恵『サクリファイス』(2008・2位)、柚木麻子『ランチのあっこちゃん』(2014・7位)、『本屋さんのダイアナ』(2015・4位)、辻村深月『島はぼくらと』(2014・3位)、小野寺史宜『ひと』(2019・2位)等を読んだ。読破率は23,5%に上った(まだまだですけどね。1/3を超えたらちょっと格好がつくかな?)。皆よい本だったので、簡単にコメントしてみよう。

近藤の『サクリファイス』は自転車ロードレースの話。自転車レースは風を避けるのが一番の課題(先頭でずっと風にさらされると潰れてしまう)なので、必然的にライバルとの駆け引きやチームプレーが大きな要素となる。筆者はこれを漫画の『弱虫ペダル』(2008~)で知ったが、それ以前(『サクリファイス』は2007)に文芸作品があったわけだ。「サクリファイス」とは「犠牲」で、冒頭にすごい自転車事故が描かれるが、誰が事故に遭ったかは明かされない。この謎、もちろん最後には明かされるのだが、上手に意外性を演出しており、これだけで読者を引っ張っていく作者の筆力には感心した。事務の大森さんも購入図書に推薦してくれた作品で、ミステリとしても人間ドラマとしても文句なく楽しめる。

小野寺史宜『ひと』は、飯塚仁先生が購入図書に奨めてくれた作品。主人公は鳥取から東京に出てきた私大生だが、高校時代に父が自動車事故で死んだ後、今度は母が突然死して、大学も辞めざるを得ず、東京でたった一人で暮らしていくことになる。ここから、彼はまわりの人たちとの関係の一つ一つ作ってはそれを積み重ねて立ち直っていくのだが、これが実に自然に描かれていて感動的。骨太の作品である。最後は高校時代のクラスメートと東京で再会して恋仲になりそう…などところで終わるのだが、彼女はエリート大学生と付き合っていた。この男と主人公の比較が実に面白く、足女生には興味深い課題だと思うので、是非読んで意見を聞かせてほしい。君たちはスマートで何事にも合理的なエリート大学生と、たくさん歩かせられる主人公のどちらを選ぶだろうか？

いちばん感心したのはやはり辻村深月の『島はぼくらと』。本当に良い作品だ。瀬戸内の小島に住む4人の高校生(朱里、衣花、源樹、新)はフェリーで本土の高校に通っている。そのため部活動に参加することができない(演劇台本を書く新は演劇部に所属してはいるが)。また、網元の娘衣花だけは受験せず島に残るが、他の3人は大学進学で間もなく散り散りになる。こういう宿命を日々感じ、受け入れながら4人の高校生活は残り少なくなっていく。その彼らに「島の生活の**豊かさ**と**せつなさ**」を強く刻印させるきっかけとなるのが「**幻の脚本**」だ。ミステリで腕を磨いた辻村はこういう小道具の使い方が実にうまい。筆者は常々、こういうのを味わえるのが本当の国語力だと思っている。辻村の作品は実にバラエティに富んでいて楽しめるので、たくさん読んで是非国語力を磨いてほしい。

柚木麻子に触れるゆとりがなくなった。この人の本もとても面白いのでこちらは次回の図書館だよりに回したい。